

43

杉田玄白との比較から再評価する
山脇東洋の近代医学への功績

栗谷 圭二

くわたに内科

緒言

日本近代医学の礎は解剖学に根差していると言われる。日本で官許の初めての解剖（観臓）を行ったのは山脇東洋である。しかしながら『解体新書』の著者である杉田玄白とは一般知名度で雲泥の差があり、場合によっては杉田玄白をして日本最初の解剖と誤解している人さえ多数いるのが現状である。今回日本初の解剖という山脇東洋の偉業を杉田玄白と比較することによりその功績を再評価する。

山脇東洋と他医師との交流

山脇東洋は後藤良山に師事し、多くの医師との関わりの中で1人何役もこなした人物である。山脇東洋は、養父山脇玄修の後世派と決別し、自我作古と称した香川修庵と対峙し、破天荒な医傑吉益東洞を世に出し、奥村良竹の力を借り『傷寒論』の汗・吐・下を完成させ、後に漢方と蘭方の架け橋となる永富独嘯庵を育てる。永富独嘯庵から小石元俊、橋本宗吉へと連なっていく。山脇東洋は漢方のみならず洋学へと続く歩みの中でスクランブル交差点のような役割を果たした人物である。そして弟子の小杉玄適を通じて杉田玄白に多大な影響を及ぼしている。

日本初の解剖での2つの事績

山脇東洋は1754年3月30日（宝暦4年閏2月7日）に官許を得て日本最初の解剖を行い、杉田玄白は遅れること17年、1771年4月18日（明和8年3月4日）に解剖を行っている。山脇東洋は解剖後、当時は罪人として捨て置かれる遺体を許可を得て「利剣夢覚信士」の戒名を与え、自分と同じ菩提寺に弔っている。これが現代の解剖供養祭の始まりである。また解剖に際し気管に管を入れて息を吹き込ませ肺の膨張を観察している。この実験的操作が日本初の生理学実験といえる。一般的には伏屋素狄が腎臓に墨汁を注入し、手で握り締め、無色透明の液体を押し出し、腎臓の機能は濾過と尿の生成であると記した『和蘭医話』をもって日本の実験生理学幕開けとされている。しかし『和蘭医話』の刊行は1805年、『蔵志』の刊行は1759年であり、およそ半世紀も前の山脇東洋の先駆的偉業である。

杉田玄白から山脇東洋への批判と矛盾

杉田玄白は『形影夜話』の中で「東洋先生、観臓し給うといへども、内象の物に是はなに、彼の某と証とし徴すべき基なければ、唯茫洋として見分け給はず（中略）僅かに一刑屍を解て蔵志を著し給うは如何なる意にや。いぶしきことどもなり」と述べているがこの批評は間違っている。山脇東洋は『蔵志』の中で「蛮人作るところの骨節剝削の書」を参考にしたと書いており、杉田玄白も一刑屍の観臓をしただけで『ターヘルアナトミア』の翻訳を行っている。偉大な東洋の功績を超えたと主張するために自己矛盾を生じているように感じられる。

考察と結語

山脇東洋は『解体新書』が刊行される12年前の1762年にこの世を去っている。杉田玄白の的外れな批評に対して山脇東洋は弁明の機会を与えられていないが、『蔵志』に「後の志士、之を琢し之を彫し、以て照乗の美を成すを得ば、則ち幸なることこれより甚だしきはなし」とあるようにこれは想像でしかないが、山脇東洋は杉田玄白の業績に諸手で喝采を浴びせると思う。それほど東洋は無私の人であり、医学の発展に生涯を捧げた人物である。杉田玄白らの『解体新書』が日本の医学を近代化に導いたその功績は多大である。しかしその功績は全てを失う覚悟で解剖の許可を取り、初めての解剖を行い、その後の批判を一身で受け止めた山脇東洋なくして実現しなかったことを忘れてはならない。